

神楽坂商店街の変貌過程

岡崎 和

本論文は、新宿区の北東部に位置する神楽坂商店街を対象にして、「土地柄」「まちの個性」がどのように形成されてきたのかを、土地に刻まれた歴史、そこに住む人々の意識の面から捉え、今後の方向性を探ることを目的としている。

当地区は、神田川、外濠によって囲まれた、牛込台地の縁の部分に位置している。それゆえ、傾斜が大きく、「神楽坂通り」は800mの距離の中で60mの標高差があり、最大勾配は11°に及ぶ急坂である。

この地に商家が立地し始めたのは、明治時代に入り武家屋敷が取り払われてからである。神楽坂は、江戸時代から寺社の多い土地で、「神楽坂」という地名が、神社の神楽の音が聞こえたから、というのも理解できる。明治末に盛り場の様相を呈するようになったが、その要因は、①行元寺門前に花柳界が形成された、②毘沙門天（善国寺）の縁日が有名であった、③早稲田大学ができ、学生の通学路になった、ことからこの地に人々が集まるようになったからだと思われる。神楽坂がより繁栄を極めたのは、大正12年の関東大震災後のことであった。下町の盛り場が焼土と化した中で、神楽坂は地盤の固さと、神田川、外濠が盾になり、被害がほとんど見られなかった。それゆえ東京中の人々が、盛り場を求めてこの地にやってきたのである。また、神楽坂の南方一带には高級住宅地が広がっていたが、これを機に下町の焼き出された社長さんなどが引越してきて、神楽坂商店街の発展の基盤が強化されることになった。

表通り（神楽坂通り）に並ぶ、毘沙門天の縁日の夜店の賑やかさと、その裏の横丁や路地に一面に広がる花柳界とが、この地の発展の原動力であり、山の手高級住宅地を背後に控え、上品さを保ちながらも庶民性をも合わせ持ち、花柳界の粋も加わって、独特の雰囲気、華やぎが形成されて

いった。

終戦を迎えた頃、この地は焼野原になり、戻ってきた店は3割、そして新しく入ってきた店とで神楽坂商店街は再スタートを切った。周辺住宅地の復興が遅れたことや、郊外人口の増加から盛り場が新宿など西へ移動したことから、神楽坂はかつての賑わいが見られなくなった。それゆえ、商店街は、対象をその周辺住宅地に絞り、規模を縮小せざるを得なかったが、商店主達は「古き良き時代」の神楽坂の再来を心に描いて、毘沙門ホールでの寄席や、縁日の復活など、様々な努力を重ねた。

50年代半ばに入ると、都心部であることからくる夜間人口の減少、業務地化、地価の高騰が起こり、また花柳界の衰退も始まったので、神楽坂商店街はまたもや転換期を迎えた。

25%の商店がビルに改築して、テナントを入れることで対応し、新しく入ってきた店は、サラリーマン対象の飲食店、飲み屋、そしてパチンコ、ゲームセンターなどの娯楽施設であり、オフィスの増加も加わって、町の雰囲気に変化している。しかし神楽坂情緒は健在で、落ち着いた上品な雰囲気、江戸情緒（古さ）が残っている。

以上のように、「神楽らしさ」は明治末から大正にかけて形成され、戦後、無の状態から、土地の人々の努力によって作り上げられてきたことが判明した。外部からの圧力によって、神楽坂商店街は変化してきているが、平成3年度に住民と区が一体となって、「神楽坂地区まちづくりの会」を結成し、神楽坂情緒を守り、育てていこうとする動きが見られる。神楽坂の持つ情緒は、歴史を土台としながらも、人々の意識の中から再生され、築かれてきたが、都心部の商店街の宿命として、古さと伝統を生かしつつも、新しい変化を受け入れ、時代に合わせていく必要がある。